

『三上吟』について

今 泉 準 一

一

其角撰の芭蕉七回忌追善集『三上吟』の現存する版本・写本は『国書総目録』に従えば版本一、写本二を数えるのみで、またその活字複刻本は勝峰晋風編『其角全集』中に載るもののみで、其角俳諧に関心をもつものにとってはもちろん、そうでなくともこの書は芭蕉没後の江戸蕉門の作家の活躍情況、またこれを離れての元禄後半期における江戸俳壇の情況の一端を知る上においても資料価値の高いものであり、この意味においてこのような伝本のすくなさは憂慮の対象となる一つということができる。そこでこの際これらについての所見をここで記録にとどめておきたいと思う。

最初にこれらの伝本についての書誌的事項について述べておこう。

A 天理図書館綿屋文庫本 a

同図書館書籍番号わ七八・三六。写本一冊。半紙本。表紙、藍色、縦二三・二種、横一六・〇種。題簽左端、「三上吟全」とある。表紙裏、白紙。ついで一枚表裏白紙。ついで本文。丁付なし。

B 天理図書館綿屋文庫本 b

同図書館書籍番号わ七六・三七。写本一冊。半紙本。表紙、灰色、下に秋草模様。縦二三・二糎、横一六・〇糎。題簽なし。「三上吟」と墨書。表紙裏、白紙。ついで本文。

C 柿衛文庫本

版本。表紙、藍色のあせ色、縦二三・六糎、横一五・〇糎。題簽なし。ただ中央に剝落の跡があり、そこに筆書きにて「三上吟」とある。表紙裏、白紙。ついで、本文、柱刻上部に「上」とあって下に丁数、一より廿七まで。ついで後序、柱刻は別に丁数、一から四まで。四の裏、白紙。裏表紙裏、白紙。

これらの三本を照合すると、A・Bの写本はともにCの版本を筆写したものと見られ、とくにAは極めて忠実に模写したものであることがわかる。唯一の活字翻刻本である晋風編の『其角全集』（聚英閣刊・大正十年十月廿五日発行）もまたこの版本Cに拠ったものと思われる。すでに同書によって活字翻刻がなされているので、ここであらためての全文の紹介の必要はないのであるが、同書は恐らくは翻刻者の読者への親切心からであろう、翻刻者の手になる句読点・濁点が付されており、また明らかな誤植と思われる箇所もあり、このため必ずしも原本の正確な翻刻書とはいえないところもあるので、以下、Cの版本柿衛文庫の全文を現在慣用文字にして掲げて、同書の正誤表としておきたい。

二

三上吟

懐旧のことは

先師道上の吟は馬夫ともか覚えて都鄙にわたり枕上の吟は所々の草庵に残りて門葉のかたみとたしなめりことさらに廁上の
唼とかやは和漢風藻の人々の得たる一癖と聞え侍るにや故翁ある御方にて会なかはに席を立て長雪隠に居られけるを幾度も
めし出ける時やへて手洗口そゝき笑ふて云く人間五十年といへり我二十五年をは後架になからへたる也と元より心事の安

樂止靜の観念にいたりて風骨の吟身を脱肉せられけんこの詞廁上の活法ならずや老かさなり杖朽てさらぬ佛のみ今は義仲寺の柿の葉に埋もれ侍り其塚の上に笠をかけたる事をおもひ出て

七とせとしらすやひとり小夜しくれ

歌「吹」海に在てといひし夜の雨も粟津によする浪の音に力を添ておもやりぬ然れとも誹言なければ草の陰にはことほりかましく秋に堪たる落葉をしのひて牌前の塵をはらふのみ也其日これかれをあつむるにあるは侍官のさほり有旅に住なし病にふし心(ママ)につかはるゝやからはわたくしならず時移り人かはりて亡人の十「指」におらるゝ事いつをむかしをよむに廿人也花摘をよんで(彌点ママ)こと(ママ)に多し文集の酬「和」をしたへるためし驚「神」のはしと成て爰に一「躰」をほとこさんとすこの巻中に僧あり此僧の風狂を精進物になしてうき世の味をしらせかほに風雪もケ(ママ)様。かやうのすかたと成て候と一しほにとむらひ候へは冬の日のならひとて灯のもとに

七吟をみたしぬ

芭蕉翁の塚は粟津の

晴嵐を名とし侍るゆへ

今七景の題を探りて

思フ往事ヲことほりを述

よそに名たつる

からさきのまつ

其角

しくるゝやありし厠の一松

零余の音のほろくと霜

館アツふくむ児から先へかけ出して

矢倉をあくむ鶴令の影

待月にこれらか機の荷口也

わさひおろしのありく新齋

履の音待然な顔をほとく覽

卯の刻からや名は辰の市

うつり香に藁袋の一二三

剃時はつす大名の髭

川音の背にひ(マヤ)づく夏木立

狐ちらはふあやつりの跡

錫杖をふりさけみればヤ月

日ルを鳴す庭をうらやむ

来衆ムを残さぬ花の生ケからし

京は久三をおしなへて春

蝶々の笠にねて行橋の上

びん(マヤ)ばな琴(マヤ)て雨乞(マヤ)をせん

東潮

朝叟

沾洲

序令

白獅

新真

角

潮

叟

洲

令

獅

真

潮

角

令

叟

一夜妻又逢事も紺屋形

鯨に添て塩しみた文

こほれたる布苔フケを渡る泪川

木の丸殿て御浪人とは

阿蘭陀か心を猿になくさまん

蚊やりをくゝる蚊は饑けめ

そくみ程残て匂ふまこも艸

風待やうに黄檗の燻

起りめの疝気おさへて須磨明石

何にならうか本阿弥の札

見し月のなら茶くふたる人を憂

思草とも一鎌に刈

秋風にさし乳もれつゝ垣の間

慮外を帳に付られにけり

唇の色に見えたる箱根山

てぐす(ママ)の波は人にまかるゝ

技の華昔掟の家厚し

箭とりの帯は藤に綾房

洲 真 角 獅 潮 叟 洲 獅 令 真 潮 叟 獅 角 真 洲
執筆

先きく三井の

入あひのかね

朝叟

冨や地金で光る鐘の胝

耳をそろゆる雪の梟

沾洲

行からにさ湯の絶たる辻もなし

序令

匍すれはたつくりく子也

白獅

月あかき豕の目いかにうかるらん

新真

衛府の火箸に掘起す菊

キ角

松茸の匂か則曆かな

東潮

放下の筋を女にて継

令

野袴に舞を所望の袖の色

獅

暗峠ツツよい物はなし

叟

力にて親付チカに成ム大力

角

池のゆるきは沢瀉ササの泡

潮

人魂の都へおつる星月夜

洲

鳥の露の十徳へちる

真

軒下に粉練俵を秋のくれ

令

一剃刀で月代の難

躑躅を多勢か中へ花盛

能東坊とはやすきさらき

鞆屋は霞かくれをなとやらん

煎薬鍋のころふ昼夜着

十娘シヤウの付帯ツケならて心なし

五畿内を見てさらぬ移香

一昏は鬼門の鐘カネで仕廻シマエけり

重チウか半かに朽し斧ノの柄

船守の凍コえてかよふ松戸川

疵キズもつかすに帰参キヤクした犬

長瓢カシ乾カもやらぬに物書モノガキて

月傾ツキカきぬもめんふり袖

後朝は鶉ウズの水を櫛シにかる

むかしの影を山の井イの尼

つれくツレて構カマを一目見ヒトミたりけり

金カネからうしに梁ヤネの艸クサとる

門閉カドヲて宗旨シュウジをさマばくマ弘コウ子シ破ハ

獅 角 洲 叟 潮 真 令 角 洲 真 潮 獅 叟 洲 角 獅

七ツの年の古郷はいさ
花心哥てやめたる狸狩
酒をかけしや石の陽炎

比良嶺雪暮江寒

山陰のくされ屏風や雪の宿

水鳥さはく子共等か関

蝸塚にたれはしかみを植つらん

(ヤ)
うちかはとしてつゐに鑿研

さ月待御壺触たる里の月

声もさほひも鶴に成比

爪紅も墨の尖にのこるらし

腹見て帰る婆の行末

宝引と百万遍と飛鳥川

亀を封する初花の池

片道は石灰の降春の雨

(ヤ)
ちんばにたてる公家の大小

角

獅

執筆

白獅

新真

キ角

東潮

朝叟

沾洲

序令

潮

角

真

獅

叟

夕昏の蚊齧にのりたる伊駒山
(A)

鯨の声は笠の下より

ゆらくと杜稗のたはこのかけ居

女房の成は鴻門の軒

悪夢を稜に出はや月の舟

尾花て打は鼻を請大刀

秋ことを六郎君へ遠からず

手向てわらふ盛物の裏

顔見せも瀧井時代のなつかしき

筋をしめるは仇ないさかひ

思はずも男波に消ぬ小提灯

運上を見て雲に行鶴

家搜の先一番に山の菴

菜飯の蓋は奇楠キナンに匂ひて

友馳すかし扇に詠やる

(A)

さす月も笈ウチに流む瀑榼

翡翠の尿のかゝる我影

洲 令 潮 獅 叟 洲 潮 角 令 叟 真 令 洲 獅 真 潮 角 叟

吉左右の恋を待也菊を伽

和泉式部か孫を持比

山科の捨傘は葉とり

脂ヤニの香を好狸々はなし

ちる花は濡身に付ん霰せよ

いつ春(ハル)之下(ノ)にうつる草案

石山やにほのうみてる

月かけはあかしも

すまも外ならぬかは

冴行や月に呑るゝ哥机

あら物すこの木葉にも針

柴刈か猿(ママ)に小蓑をもどされて

たれ轡走る谷の脇差

金持た心かまへも四十年

うす彩色に夜を味ふ

転寝に国をとほるゝ清見寺

令

獅

洲

真

角

執筆

序令

白獅

新真

其角

東潮

朝更

沾洲

己か虫歯につらきいり酒

綿嚙のやゝにつもれは指に巻

土圭の欲は刻をよむらん

摩耶近し親の日とても参られす

空鉄砲を玉篠に待

水無月は口も吸へき青簧垣

かねし心は手拭を撰

かなな序も物くふやうにいかはこそ

狗の日に来る小白かはゆき

細脚に灸ぬ所を月と花

椿の杖にあたら其朶

此石に江戸を見せはや春の風

小僧か髪を一日の泣

拍子木に力か入てかしは散

むこくしたみし火の酒の跡

神主の母はかならず法の月

段く追に薫の石竜カマヘヒ

浜木棉にすへて三里は磨砂

真

令

潮

角

真

叟

令

潮

角

獅

洲

叟

令

真

獅

洲

潮

角

大夫に逢て華清宮問^フ

目の塩に山椒味噌の夕時雨

こむらかへりに何をぬかつく

山鳥は犬追物にはつれけり

千間の茶におつる此瀧

点滴^{トハシ}の筋目なればや二人扶持

昼間かよふをしらぬ高保

一槩に文つかみ込たもと口

先吸物と帽子うつむく

た^{ウマ}が花と笑ふてやるも八軒屋

初汗かいて長閑さをしる

勢多

夕陽人影与橋長

空の香や頭巾にしめる昏の橋

提灯の威は玄猪也けり

ひくくくと鶉^{ツバハ}の集^{ツバハ}曲るらん

洲 叟 獅 令 真 洲 角 潮 獅 叟

執筆

新真

其角

東潮

しらすや爰は連哥看板

三日の月此出をつゝけ十五日

稽古の中は西瓜ねて居ル

道すから梵論に向ふて轡虫

いさ慰まんトモ訥にむね打

埋火の額の跡とおほしくて

軒の鱒をぬすむ酒盛

大字書病後の腰をためしけり

天狗のあたり蟬の遠近

一袋京都の揚子くろむ迄

延喜の御衣はわれくか秋

新葉に粒納豆をひろふ也

筑波の月の赤土に入

物やるも馬工郎か手の其花に

北頭にはけふの光明

百里ゆく春は蠟燭ふし

古筆に疵の娘かたつく

空ウ腹のはし折おろす恋の門

朝叟

沾洲

序令

白獅

洲

朝

角

令

叟

真

獅

叟

真

令

潮

角

洲

獅

浅香のかつみ水鍋に入

風下は田哥のころふ時もあり

銀を座頭か齋の面目

酌子栗それものこらぬ人心

ふとしく建^キん御材寄の月

切紙て羽織をせかむかけ踊

うとんの釜に大黒の汗

朝またき朔日からの恪気也

との小学も前髪の陰

上下て塵壺の鼠あつかはん

一むら雨を休むやね葺

子心をすかすも曾我の紋尽

新鈴買っていさや催馬楽

余花にさへ松は六位のみとり也

池をまかする殿置の亭

潮 令 叟 角 真 潮 獅 真 洲 獅 角 叟 令 潮
執筆 洲 令 叟 角 真 潮 獅 真 洲 獅 角 叟 令 潮

鴻雁幾行更不孤

晚風帶月落東湖

夕霜や堅田にかよふあふら筒

虎の夫婦か家しらぬ猫

蜀黍の裂目に色を染出して

銀杏を待風さはく也

月すめは肩にのる子を声て漕

喰こほすのみ馬は年よる

遺愛寺に瓶をすえ置筆酒

農人ともか願ふ一雨

治れる代にはいたく足のうら

景天草の糸のはりあひ

桶を見て飛弾をうらやむ心哉

ねるほとねても典薬頭

鞆二ツ巻縮緬の手さはりに

女蔵人かも逃て入月

媒か成さうな物囹鷹

定家かつらは野囃子に有

花にせん此棒組も下戸ならば

沾洲

序令

白獅

新真

其角

東潮

朝叟

獅

角

潮

令

叟

洲

角

獅

真

叟

破魔矢に指た草履三足

鶯のあとに十念さつかりて

齒にあてなをす小田原の水

此悠に鍛冶の鉢巻はかり也

狼ゆへに密夫も来す

蟹ならば忍の浦とうたはれん

とにかくこちて(ヤ)部屋(ヤ)の讃談

連雀を師走の市のみやげ物

唐土へむく山の発煩(イシキ)

眩暈に心つくしの日の盛

懸目安にて月か照んく

ちる柳継母所しとけなき

水口籠裏のよはる葛のは

三の山いらたか珠数をそろ盤に

いひかけに逢顔のけうとき

ほちくと柄杓の水の畳迄

夜るは休むか蟻の東西

きつしくに居んも花の車僧

獅 洲 令 潮 角 真 叟 令 潮 真 洲 叟 令 潮 角 真 洲 獅

尤つけて世をわたる春

やはせにかへる船は今

つゝけとや枯木にさはる帆の光

石露の葉けふる松明の落

西南かほかぬチャンの夕はえに

辻人形の耳はあらまし

小盗を扇てし(ママ)ばるけふの月

はたかり草の腰を折風

行尊の鬢(ママ)ばざけたる茅の色

灯心引の手に津吐ツハキ

干ぬうちは画絹ワクの變を打違

雲居に休む棟上の人

むら鳥のいつくふれ行麩

三室くつれて入札に成

丸燕の出シによいとは今そ知ル

妾の疣は月をめいわく

執筆

東潮

朝叟

沾洲

序令

白獅

新真

其角

潮

叟

令

獅

角

潮

叟

忍ふ夜の先肩かいて花火見ん
 目出たい寺の傘につゆ
 大かたは末に成たるところてん
 蚓の智恵はぬれ道へ行
 広敷にいつ迄草の木工左衛門
 御消息にも見ゆる不機嫌
 野の宮は獨按摩をうちつけに
 罪なき配所精進の時
 鶉人をはつたる賽の筒
 ちょッちょとぬくふ衣の染物
 人参に旅の装束なされける
 万石とりの門は笙の音
 詩工は虹をつかんで爰にねん
 月待波のまなはしを刻
 葬の軸もつた我をふれもせず
 紫苑にかさる少年の母衣
 盃もはいたる沓を馬上より
 天晴鷹といふ鳥も鳥

洲 真 令 獅 角 洲 叟 真 獅 潮 角 洲 叟 真 獅 令 獅 角 洲 潮

涼しさは光るなげしに瀧の音

本尊のために紙子風呂敷

ころふ絵を起す所か花の雪

小春に似たる春は正しき

右七「局昼」夜従未之上「刻至

丑之上「刻満尾

懐旧詞引

うつみ火やいつ燃しさる檜箸

なつのし水のひくむすひ

ともかけたり

埋火や氷室になるゝ爪の数

遊海晏寺

ちるもみち掃ぬ心や僧も鹿

達摩忌やかりほの上の包ミ金

かねの声無常頭に落葉哉

飯台や五器も汚さず納豆汁

洲

真

令

執筆

心六

心六

行露

心六

心六

心六

弁外

心六

周東

闇指

專仰

山蜂

暮寒し刃鉄吹出す市の声

机出せさらに三「餘の雪の富士

摺鉢を四の鼓の寒さかな

鴟の尾やいつふり切て霜構へ

思羽の紺青さむし御前池

泥亀のふらぬ目をみる落葉哉

関寺にたか寝起なるつはの花

川越に談義聞るる枯野哉

しくるゝや笛より覗く灯籠堂

沢蟹の缺も赤し今朝の霜

から鮭のはたへ也けり鉢敲

冬枯やなにはの芦も曲りなり

瞬の昼をは何と神無月

さゝん花の蜂や其隣も老にけり

酒買に陸をあかれは玄猪哉

水仙に兎うかゝふ霜夜哉

湯豆腐や粟津の雪のまくり切

旧庵にしらぬ僧あり初しくれ

江墓

領芥

兀峰

白桜

仙鶴

雪花

梅花

沾徳

楓子

琴風

口遊

高尾
日寿

我常

心水

魚干

景帘

紫紅

百里

凧やさし木なりしも森の声

松笠のひとり立たりうす氷

筆頭すずにはぬる木葉や三上山

しみくと子は肌へつくみそれ哉

みそ萩の種はこほれて枯野哉

一石の苔をあらひ塔婆をたて

短袖に香華をとりて

回り来る空や小春の旅日和

爛なる蟹もあるらんさよ鴉

梟や暁起の炭ふくへ

さはしるや一枚障子冬牡丹

蟬丸と凧対の隣あり

白波の畳むに遅し初木葉

立舞や里へ鴉のはねつるへ

山水に後れて得たり枯葺

初霜や油をしこくむら雀

涼ちるや城の稻荷の小豆飯

凧やしらりと星の目を出す

曉松

全阿

栢十

秋色

昌川

桃隣

友雅

凍雲

青巖

太岱

懷山

素海

雪川

由之

橘叟

後凋

落葉見ん人もほつく切通

鳥の尿またかたまらぬ落葉哉

炭釜や峯にとたえし雪の僧

埋火も心もとなく待夜哉

海越に田地をぬらすしくれ哉

つかもなき所へさすや冬日影

北殿や落葉かうへを嶋つたひ

きらくくと比良は月夜の時雨哉

身は楽に時雨で通る野馬哉

燕粥をさます堅田のあらし哉

投た猫訴訟顔なる衾哉

飯鐘にうつろひやすし比叡の霜

水仙や氷る拳を菴まで

口真似の荆也ける枯野哉

凧に南かしらやうかぬ顔

その人はもし渡唐もや初舞

松風に自己のはたへを火燵哉

涓泉

竹船

石泉

香山

里東

野径

潘川

微房(マヤ)

棧香

立朝

入松

向漁

里扇

皆可

月圃

回川

是橘

かれ尾花のあらましは

門人をしのひ侍り

次郎兵衛は何あきなひを夷講

禪堂を覗く音せぬ落葉哉

故翁きさかたに遠遊の年あり

(マヤ)
淳海のはてしなきおもひを

晋子にかたり侍るとて

象潟や竜の尾わかる村霽

そのうちや雪三尺は茶一服

蓑虫の下に何着て時雨哉

七尺やかたへしくるゝ金柱

新発意の後の父母也帰花

凧よ吹のこされて檜笠

橋守よ松はかれたか雪くもり

折腰

冬借の五斗俵出たりませの菊

一休の魂のるかおち葉舟

霜も雪もけさの茶にしれ水車

横几

千琳

其喙

紫麈

秋航

露柏

甫盛

素林

鉤月

亀毛

予象

我助

しら露もこほさぬ萩のうねり哉

とからひたる有ましをゑさんして

たうひける七とせ先のいき貞を

見ぬ世の友におもひなして

画心のしはめるさまや比巴の花

しこる碁や何れ置手の霜柱

水仙の若葉の露や宇佐美笛

あけ火燧よこ折ふすやさよの山

十月や紅葉をしほる鳥の音

松の鷺水のうへをうらみ哉

けふはかり至楽をよむも時雨哉

待人の陽やあつめて冬牡丹

草も木もにらみ付たり冬の月

常灯の待乳山からしくれ哉

杜若ありや研屋の冬かまへ

焼味噌は鳥の空音の霜夜哉

凧や栄螺吹込板ひさし

初雪や鱈に盛て二子山

専吟

適三

酉花

一雀

撃水

虎笏

指馬

千調

玉陽

毎閑

芫月

大町

東鞆

檀泉

霜時雨それも昔や坐興菴

嵐雪

懷旧七險後序

境中人每為物所軋而不
能自立焉夏見紅衣則覺
熱冬見碧衣則覺寒流注
顛倒全墮五里霧中矣境
外人如泥之珠如砂之金
入垢穢地而現清淨相不
必厭垢穢不必着清淨卓
然常遊于諸法之外也在
昔歐陽公煉文字戲說三
上功夫揭廁上為其一願
文章者呼吸宇宙清氣而
雪橋之馬風隄之床固其
所也安得踞穢土之廁以
助雅興哉然其与道上枕
上並稱鼎立為三奇者豈

非_下吾所謂入_ニ垢穢_ニ現_{スル}清淨_一
之道_上耶。且夫人世滿前種
種幻相。孰_レ非_ニ垢穢_ニ金壁_ハ如
瓦_ノ。衣帶_ハ如_レ械_ノ。宦門_ハ如_ニ阿鼻_一
城_ノ。魚市肉山_ハ如_ニ尸陀林_一。濃
蛾靚粧_ハ如_ニ革囊血_一。雖_レ曰_ニ青
山白水_一。究竟亦蟻蛭蹄_ハ灣
耳。然_ハ則娑婆界_ハ中_ハ是一_ハ大
廁_上也。吾人生_ニ於斯_一。老_ニ於
斯_一。病_ニ死_ニ於斯_一。則舍_レ之_ヲ將安
往_ニ乎_一。要在_ニ于得_ニ清淨_一心_ヲ。以
入_ニ遊_ニ戲_ニ三昧_上而已_ニ。復何區
區_ト問_ニ三_上之清穢_一哉。芭蕉
翁曾_テ以_ニ屮言_一鳴_ル及_レ晚_ニ。薙_ニ染_一
為_レ僧_ト。芒鞋竹杖_ヲ率_テ以_ニ羈_一旅_一
為_レ宅_ト。蓋其心悅_ニ嚮_ニ所_レ謂_ニ境_一
外人_ヲ而慕_フ焉_一者_一也。一日与_ニ
諸客會_シ。如_レ廁煉_レ句_ヲ。譚餘及_フ

此。當時以為一場閑話。未
知其味。東都晉子。出于其
門。而青於藍者。翁沒七十
于茲矣。庚辰冬十月十二
日。值其忌辰。乃集同社六
人。作懷旧七吟。回論先師
厠上功夫。以冕其首。晉子
帶妻兒。笕塩米。使酒啖肉。
每往來軟紅街中。其作新
奇壯麗。不下以先師枯澹為
範。蓋能得翁之心。而不踐
翁之跡者。是非非世俗境
中人也。否則豈能窺其玄。
以論厠上之妙哉。噫。學此
道者。苟不知其心。而全其
跡。徒以厠為腹稿。一術則
其不下。与李赤遺臭者。幾希
矣。不知使紫始神聞斯言。

則亦拊^テ掌^ヲ稱^シ善^ト哉^ハ乎^ヤ否^ヤ

龜毛居士戲書于

柳浪舍